

## 新年のご挨拶

長崎歴史文化協会会長 小川 洋

平成二十九年を迎え、謹んで御祝詞申し上げます。

旧年中は、当協会が主催いたしました、講演会・学習会をはじめ恒例の史跡見学会・研修などの諸行事に対し、皆様方から多大のご支援、ご協力をいただき厚くお礼申し上げます。

おかげさまで、当協会の活動も三十五年目を迎え、県内外から高く評価されているところでございます。この『ながさきの空』も定例の発刊を重ね四一四号を刻むこととなりました。

本年も『長崎学』を中心に、長崎の歴史文化を研究し、地域文化の振興に貢献してまいりたいと考えておりますので、引き続きご支援くださいますようお願い申し上げます。

平成二十九年正月

## 酉年によせて

越中 哲也

長崎歴史文化協会の創立は十八銀行元頭取清島省三氏を中心に昭和五十七年五月十一日でした。本年は創立三十五年となります。そして会の広報紙・短言『ながさきの空』第一号を発刊したのは昭和五十七年八月二十五日水曜日でした。その一月まえの七月二十三日長崎大水害がありました。事務所建物の一階まで水が押し寄せてまいりました。その翌日は大変でした。



鶴亭筆 花鳥図  
(良林文庫蔵)

さて、今年は酉年なのですが、古代より我が国に中国より伝えられた暦法(旧暦)によりますと「丁酉の年」という。この暦法は先号の「ながさきの空」

丁の文字は十千の四番目にあり「万物丁壮になる」とあり、今年は整然と木が茂るようになる年である。酉の文字は老または飽と韻通じ「万物すべて十分に完成し老いる」の意とある。兎も角、今年はきつと良い年であると考えている。

今年の酉年の文字は酒を盛る器の象形で酒の意味に用いられるそうで、鳥とは関係のない文字だそうです。

酉年と言えば鶏が代表して語られる。「鶏群の一鶴」と鳥の中では鶴が第一で鶏は家庭用の平凡な鳥とされているが中国・戦国時代の物語では前回の「ながさきの空」(第十七集)に書きましたように斉の孟嘗君が秦の昭王にとらわれ、其れを逃れるために函谷関で、朝の開門は鶏が鳴かないと開門しないとあり、孟嘗君は部下に鶏の鳴き声を上手にまねる者がいたのを用い、朝早くウマク関を開かせ逃れ出た話は有名で漢詩にもなっており、我が国の古歌にも其の話は伝わり次のように詠まれている。

夜をこめてトリのそら音ははかるとも 世に逢う坂の関はゆるさじ  
私達も若い頃、この函谷関を訪ねた事がありました。現在は峠が開かれ大きな道があり、付近は森で下には川が流れている静かな風景でした。

長崎の湊を「鶴の湊」という。港の型が鶴の形に似ているからであると言う。一説には「浦上川が鶴の嘴で羽根は中島川ですよ」と言う人と、「県庁の丘が鶴の頭で港と中島川方面が羽根です」と言われる。また、長崎の港は瓊浦と古来より文人達は名づけ、多くの詩文が残されている。瓊のヨミは鶏に通ず。鳥の中では「鶴は千年・亀は万年」というので、この事より鶴の港になったのであろうと先輩方は私に教えられた事がある。

長崎の南嶺派の画人に「鶴亭」がいる。鶴亭は長崎黄檗宗聖福寺の僧侶であったが享保年間神代熊斐の門に入り花鳥画を学び、特に鶴の写生図を得意とし、延享年間には京阪方面に其の画風を広く認められている。

先日、川原瑞穂女史より、長崎県松浦市の鷹島開田の人達は今も鶏を飼わない次の伝承があるという事をおききました。

昔、博多・唐津方面に攻めてきた元軍が鷹島沖にも船を止め、上陸してきたので住民は全て逃げましたが、開田という山奥の一軒家には、まさか、この奥地にまで元軍は来ないと考えていたところ、一軒家の鶏が鳴いたので元軍が乗りこんできて八人家族のうち七人が殺され、灰だめ

で説明させて戴きましたように中国の暦法「十千十二支」によったものであり、干は幹であり、支は枝であると説明がある。「幹は母であり、支は子である」と説明し、『史記』には「十千十二支」のことを「十母十二支」とも記してあった。之の中国の暦法は中国最古の書籍『書経』に既に記してある。

中国の暦法が、いつ頃より我が国に伝えられたのか不明であるが、天平時代より以前であろうと言われている。又、我が国の建国については昭和十五年(一九四〇)十一月・建国二六〇〇年記念の式典があった。二六〇〇年前の日本と言えば、西暦紀元前六六〇年となる。然し我が国の史書をみると五九二年には崇峻天皇・推古天皇・聖徳太子等の事跡をみる事ができるので我が国の紀元は、もつと遡っても良いのではないだろうか。すると、我が国に於ける古代中国式の暦法は、紀元二六〇〇年以前より伝えられていたと考えられている。

今年の千支「丁」の文字は我が国では「ヒノト」と読んでいる。十千の事について、原始時代の中国では人間社会に一番関係の深いものとして「木・火・土・金・水」の五ツがあり、其の五ツの物が元であるとされるが、又、あるいは「もつ」と素朴な考えかた、つまり五本の手足の指の数が起源であるとの説もあり、或は一番目につきやすい黒・赤・青・黄・白の五原色からきたのかもしれない」と諸橋轍次先生は『十二支物語』に記しておられる。

その次に、物事には全て「強弱・前後」の二つがあるので之を「兄と弟」にあらわし、「木ノ兄・木の弟。火の兄・火の弟…」と表現すると十千となり、「木の兄」の文字を甲、「木の弟」の文字を乙。「火の兄」の文字を…と順に丙丁戊己庚辛壬癸の十字をあて「十千」となったと言う。

「十二支」は天体の十二ヶ月より考えられたそうです。然しなぜ多くの動物の中より鼠・牛・虎…を十二支に選んだのか不明だと言う。今年の丁酉の年についての説明をみると、

に隠れていた婆さん一人だけが助かったと言う。以来開田では「ニワトリ」を飼わないそうである。

『長崎古今集覧名勝図絵』(一七二〇年?)の「異国ヨリ持渡鳥獣図」の中には「風鳥」とあり「インテヤの内パース島…パラディスホーフ」と説明。「駄鳥」(蘭語で「ガスワールス」)図には「安益多阿兩州之産鳥也…」とある。この他にも多くの鳥類が長崎に舶載されている。

また、長崎・大光寺の本堂(餘問)には森陽信の「桐と鳳凰図」がある。陽信は猿図で有名な森狙仙の兄である。

### 風信

一江戸時代の長崎正月図風景は『長崎古今集覧名勝図絵』(昭五六・長崎文献社刊)を参考にされるとよい。そこには長崎風の門松、チャンメーラ吹き、俵子賣、花心點、の四図がある。正月行事内容を記したものととしては大正二年四月長崎市出版の『幕府時代の長崎』第十章「風俗習慣」を御参考にされるとうい。

一其の内に他郷と「其の習慣を異にする正月行事」として次の事を記しておられる。

元三(元日より三日まで)の雑煮・餅・鱒・大根・芋・菜を雑える事。二日はチャルメラとラッパ・太鼓・磬ノ如きものを用い唐風の囃子を出し各家を回り盛装せる女子が踊演し各家を祝し回る事。四日より明治時代以前は踏絵はじまる事。十四日は小供達はモグラ打をして各家を廻る事。二十日は骨正月として正月の雑煮に用いた鱒の頭及び骨を入れ雑煮を食す。

○その他、七日には「七草がゆ」を食す。この時、宝袋に擬した餅鯛を入人は帰さぬの奇習あり。十一日、商家にて「帳祝」あり。

○先日、二十六聖人記念館レンゾ神父様来訪あり、日本イエズス会管区長になられる由。一同御祝詞を申し上げた。

○今月ご寄贈いただいた書籍

一レンゾ神父より「小浜の十字架の研究」。パレット写木より新しい十字架の研究発表でした。(キリシタン文化研究会発行No.148)

一佐世保史談会より『談林五七号』中島眞澄氏の「肥前風土記」研究を中心に松浦家物語等 多くの論文が収集されている。

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二一 一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 2F

